

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530703

研究課題名(和文)同志社大学新聞学の形成過程と展開についての歴史社会学的研究

研究課題名(英文)A Study of Historical Sociology in Journalism Studies at Doshisha University

研究代表者

粟谷 佳司 (AWATANI, Yoshiji)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：90411115

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、同志社大学における新聞学専攻の形成と展開を通して、新聞学という学知とその文化を考察した。同志社大学の「新聞学」を戦前から戦後にかけての政治学などの学問の知との関係、戦後大衆化する大学と学生の文化などから複合的に考察し、その生成と展開について検証した。特に、鶴見俊輔を始めとした新聞学専攻の教授や京都の知識人、関係者の言説の研究から、「新聞学」という学知の変遷、学生が関わる大衆文化をその社会空間や言説空間の成立と展開過程から、文献や資料、インタビュー調査などによって分析した。

研究成果の概要(英文)：This study explores the knowledge and culture of the academic discipline of "Journalism Studies," by looking at the formation and development of the Journalism Studies Major in Doshisha University. A composite approach was made to the University's history of the formation and development of Journalism Studies: in terms of its relevance to the knowledge of political science both before and after the Second World War as well as from the perspective of the post-war popularization of universities and the culture of university students. In particular, an analysis was made using publications and other reference materials and interview surveys of the transformation of the knowledge of Journalism Studies with a focus on remarks and notes by Shunsuke Tsurumi and other professors of Doshisha University, intellectuals living in Kyoto and related parties, and of popular culture involving students with a focus on the process of creating and developing their social space and discourse space.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：新聞学 鶴見俊輔 山本明 八田恭昌 大衆文化 政治学 和田洋一 戦争体験

1. 研究開始当初の背景

これまで日本のアカデミズムの歴史に関する研究は、多くの場合、東京帝大を中心にした学問史であることが多く、東京帝大に所属、あるいは出身の学者の議論が取りあげられてきた。小熊英二『日本人の境界』、福岡良明『辺境に映る日本』、国語学史の場合は、安田敏朗の研究（『帝国日本の言語編成』など）が挙げられる。その重要性は言うまでもないが、知はその中心でのみ生産されたわけではなく、知の中心から外れた高等教育機関では、別の知の系譜が見られた。

それらは、「中心」のアカデミズムの動きを視野に入れつつも、それとは距離をとった独自の知を生み出してきた。それらはいかなるものなのか、また「中心」のアカデミズムといかなる距離があり、その背後にはどんな要因があったのかについて、本研究では「新聞学」という領域を、特に同志社大学の学知を中心としながらから歴史社会学、文化社会的に考察することを目的とした。

2. 研究の目的

本研究は、同志社大学における「新聞学」の系譜を戦前から戦後にかけての学知との関係、距離のとり方、戦後大衆化する大学と学生の文化などから複合的に考察し、それらの学知に潜む可能性や問題性などを検証した。この研究から、「新聞学」を中心とする学知、大衆化が進む大学と市民、学生などが関わる社会空間、言説空間の成立と展開過程について資料やインタビュー調査などによって明らかにするものである。

3. 研究の方法

「新聞学」という学問領域を、大学における制度的問題、新聞学を形成する知識人の言説、大衆社会における新聞学の言説の応用、展開を中心に歴史社会学の観点から考察した。

(1) 「新聞学」前史として「政治学」の学知を学部の制度とともに考察した。

(2) 戦後の同志社大学における「新聞学」の学知として、鶴見俊輔の業績を中心に分析しながら、同志社大学新聞学の教授であった、和田洋一、山本明、八田恭昌らの業績についての検証を行い、同志社大学の新聞学という学知が如何なる位相にあるのかについて考察した。

(3) 同志社大学の新聞学研究における特徴のひとつである大衆文化研究とその応用について、60年代後半に同志社大学の学生であり、その後文化の送り手となった関係者へのインタビューを中心に資料と共に検証した。

4. 研究成果

研究の方法により資料収集、分析を行った。研究で得られた知見は以下のようにまとめられる。

同志社大学新聞学の前史として、『土曜日』、『世界文化』という知の言説空間を中心として考察し、戦前と戦後を断絶から捉えずに京都の知識人集団の連続性と新しい運動の展開として検討した。問題意識を見ても、戦前と戦後のあいだには深い連続性があり、その一つがジャーナリズムに対する関心である。そして、この問題を中心的に担ったのが、雑誌『土曜日』や『世界文化』の同人であり、戦後には『夕刊京都』などにかかわっていく人々である。和田洋一、林要、能勢克男や住谷悦治の名前をあげることができ、それぞれが同志社とも関係のある人物である。このような知識人や知識人集団の思想と活動を中心としながら、近代日本におけるジャーナリズムの思想や新聞学に連なる諸問題を多角的に検討することで、同志社の「新聞学」が形成される精神的な土壌を浮かび上がらせた。

そして、同志社大学新聞学専攻において1960年代に活躍した鶴見俊輔を中心に考察した。そして、彼の業績を多角的に分析しながら、鶴見が同志社時代に著した『限界芸術論』の内容分析と、その文化論の大衆文化の担い手への応用について考察した。その際、鶴見が同志社大学の教授になるまでの経歴において、京都大学人文科学研究所の桑原武夫、同志社大学新聞学では教授の和田洋一や山本明らとの交流を検討しながら、彼の大学内での業績だけではなく、大学外での活動である「思想の科学」、「ベ平連」との関連における人的ネットワークについても分析し、これらの活動が関西を中心とした大衆文化のひとつであるフォークソング文化の運動と結びついていることを確認しながら、大衆文化への鶴見の言及について考察を行った。

鶴見が同志社大学の教授であった1960年代には、彼の文化論にとってメルクマルとなる、『限界芸術論』、『折衷主義の立場』、『日常的思想の可能性』、『不定形思想』、『現代日本思想体系12 ジャーナリズム論』などの著書、編著を發表している。

そして、鶴見は同志社大学の教授として学生の指導を行い、そこで『大衆の時代』(平凡社)を編集し、大学では「ジョージ・オーウェル研究会」を行っていた。鶴見の『限界芸術論』が刊行されたのは、彼が同志社大学教授の時期であり、収録論文には同志社大学の紀要に發表されたものも含まれている。

また、大学外においては片桐ユズルとの交流に注目した。なぜなら、片桐を中心とした関西のフォークソング運動とその周辺において、鶴見の「限界芸術論」が「使用」されていたからである。

また鶴見の文化論が、彼が関わった社会運動とどう切り結んでいたのかについて、鶴見が大学と並んで活動の場としていた、「思想

の科学」と、「ベトナムに平和を！市民連合」（以下、「ベ平連」）という言説空間に注目した。大学人としての鶴見は、大学という場と社会運動の場とが交差するなかで、彼の言論運動を行っていたのである。

「思想の科学」は、鶴見が大学というフィールドに就く前から活動を行っていた場所であり、大学という空間における人的なネットワークと関係しながら、その活動は行われていた。そして、「思想の科学」には、室謙二や山口文憲ら「ベ平連」に関係する人物が関わっており、ある時期の「思想の科学」は、室謙二や片桐ユズルが編集を行っていた。

「ベ平連」という活動の場については、「ベ平連ニュース」を中心に分析した。そこには、本研究のためにインタビューを行った中川五郎氏の文章も掲載され、フォーク歌手のジョン・バエズを呼んでコンサートも行っている。「ベ平連」という活動は、反戦運動のなかに文化や音楽が実践として「使用」される言説空間をも作っていたのである。

そして、当時の同志社大学に関わりのあるフォーク歌手、中川五郎氏へのインタビュー調査により、当時の状況への当事者としての証言を得た。

中川氏は、高校在学中からフォーク歌手として歌い始め、鶴見が教授を勤めていた同志社大学に入学する。その後、雑誌の編集や作家として活動し、ボブ・ディランの歌詞の翻訳、チャールズ・ブコフスキーやハニフ・クレインなどの翻訳などを行っていた。中川氏は大学に入学する前に鶴見の著作を知り、鶴見の勤めていた大学を受験し入学した。そして、ミュージシャンとしても活動していた大学在学中に書いた書物のカバーには鶴見が推薦文を寄せ、またその後フォーク関係の雑誌（「季刊フォークリポート」）編集を行っていたときに発表した小説で裁判になると、鶴見は意見陳述を行った。このように中川氏と鶴見は何度か接近していた。

鶴見の活動と同志社大学の新聞学の知がどのように大衆文化へ応用されていったのかについては、彼が関係した知識人、大衆文化に関係する人々のネットワークをピエール・ブルデューの社会関係資本の理論を適応しながら考察した。鶴見は、大学や「ベトナムに平和を！市民連合」（「ベ平連」）、「思想の科学」というようないくつかの活動の場から、「社会関係資本」によって持続的な関係のネットワークを形成、所有しながら彼の活動を行っていたのである。

また、同志社大学における新聞学専攻の教授であった八田恭昌の研究論文および文献を収集し、戦後ドイツ政治思想史研究における八田の獨創性及び思想的特徴についての考察を行った。その際、八田の研究成果の特質を明確化するため、同志社大学法学部教授であり同じくドイツ政治思想史研究者であった脇圭平の研究との比較検討を行った。また、この作業を通して、当時のドイツ政治思

想史研究における同志社大学の研究の特異性を明らかにした。ここから同志社大学の新聞学における政治学との関係についての知見が得られた。

八田と脇は共に全体主義に対する批判的な見地から政治思想的な考察を行っていたが、その内実はかなり異なり、脇がヴェーバー的な観点のもと、政治的思考の未成熟が招く政治的な結末を警告し、合理主義的かつプラグマティックな視座の必要性を強調するのにたいして、八田はそうした視座に欠けているものを指摘した。すなわち、かかる近代的視座がユーモアや笑いの要素を無視していること、またそうした無視が全体主義国家の成立へと結びついているとしたのである。このような主張は合理主義的な視座からの全体主義批判が主流をなしていた当時の政治思想史のコンテクストにおいてはきわめて異色であり、それだけに獨創性と示唆性に富んでいたといえる。

そして、新聞学専攻の教授であった山本本の言説・思想について、彼の業績を検討することから、その大衆文化論の特徴を考察した。まず、山本の風俗研究の方法の一端を、「反マジメ」というキーワードから特徴付けた。また、山本の戦争体験が大衆文化や風俗の研究を含む知的活動を駆動させる要因のひとつとなっているということを彼の業績から確認した。このような山本の大衆文化研究、風俗研究を中心とした新聞学研究のモチーフは、鶴見の『限界芸術』のあとがきにおいて記された、鶴見と同僚であった時代の交流、あるいは鶴見との共編である『持続と抵抗』に収録された論考などからも検証されると考えられる。

同志社大学新聞学という場は、大学という知のフィールドを社会関係資本として、個々の活動は様々でありながら緩やかなネットワークにより言説空間の形成し、その一部が大衆文化へも応用されていったのである。

以上が同志社大学新聞学の形成と展開についての共同研究により明らかになった知見であり、研究期間終了後も研究を継続しながら、これまでの知見による成果を発表することを予定している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

福岡良明「反米と親米」『分冊百科 日本の歴史』、査読なし、2014、44号、22-24頁

粟谷佳司「個人史と文化的記憶が交わる音楽の位相」査読なし、「図書新聞」、2014、4月5日号、4頁

根津朝彦「桑原武夫の思想形成 幼年期から京都一中時代」『京都大学大学文書館研

究紀要』査読あり、第12号、2014年、1-18頁

根津朝彦「『世界』編集部と戦後知識人知的共同体の生成をめぐる」『メディア史研究』査読あり、第34号、2013年、41-64頁

福間良明「書評 占領する眼、占領する声」査読なし、「図書新聞」2013、3月20日号、4頁

福間良明「「騙される」という悪徳」「中国新聞」査読なし、2012、12、15朝刊、3頁

粟谷佳司「戦後日本の知識人と音楽文化-鶴見俊輔、フォーク音楽、限界芸術論をめぐる」『立命館産業社会論集』査読あり、48巻2号、2012、95-110頁

長妻三佐雄「ナショナルリズムと多様性の思想」『政治思想研究』査読なし、2012、12号、114-134頁

〔学会発表〕(計 2 件)

粟谷佳司、平石貴士、鈴木慎一郎「ワークショップ 音楽文化の歴史社会学」日本ポピュラー音楽学会第24回大会、2012年12月9日、武蔵大学

粟谷佳司「戦後日本の知識人と音楽のメディア文化史」立命館大学産業社会学会、2011年7月5日、立命館大学

〔図書〕(計 8 件)

趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『講座東アジアの知識人4』有志舎、2014、370頁(122-140頁、根津朝彦「戸坂潤」)

武田知己、萩原稔編『大正・昭和期の日本政治と国際秩序』2014、392頁(236-263頁、長妻三佐雄「三宅雪嶺における「哲学」と「時論」のあいだ-昭和期の言説を中心に」)

苅部直、黒住進、佐藤弘夫、末木文美士編『岩波講座 日本の思想2 場と器』岩波書店、2013、309頁(245-270頁、長妻三佐雄「声なき声はどう届くか」)

古賀啓太編著『政治概念の歴史的展開第5巻』晃洋書房、2013、241頁(131-155頁、馬原潤二「啓蒙」)

伊藤陽一、浅野智彦、赤堀三郎、浜日出夫、高田義久、粟谷佳司編『グローバル・コミュニケーション』ミネルヴァ書房、2013、216頁(134-135頁、粟谷佳司「音楽空間」)

浪田陽子、福間良明編『はじめてのメディア研究』世界思想社、2012、288頁(243-249頁、粟谷佳司「音楽空間論-「ユーザー」と限界芸術論から考える」)

長妻三佐雄『三宅雪嶺の政治思想』ミネルヴァ書房、2012、218頁

井上克人編著『豊穡なる明治』関西大学出

版部、2012、284頁(133-154頁、長妻三佐雄「三宅雪嶺と長谷川如是閑における『天』の観念」)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

粟谷 佳司 (AWATANI, Yoshiji)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：90411115

(2) 研究分担者

福間 良明 (FUKUMA, Yoshiaki)
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：70380144

長妻 三佐雄 (NAGATSUMA, Misao)
大阪商業大学・総合経営学部・教授
研究者番号：80399047

馬原潤二 (MAHARA, Junji)
三重大学・教育学部・准教授
研究者番号：40399051

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

根津 朝彦 (NEZU, Tomohiko)
同志社大学・人文科学研究所・嘱託研究員
研究者番号：70710044